

台風の子

小川未明

青空文庫

龍夫と源吉の二人は、仲のいい友だちでした、二人は、台
 風が大好きなのでした。

「源ちゃん、また台風がくるって、ラジオでいったよ。いつく
 るかなあ、きょうの晩くるかもしれない。いまごろ二十キロの速
 さで、海の上を吹いているんだね、すごいだろうな。」
 彼は、雨と風の荒れ狂う渺茫たる海原を想像して感
 歎の声を放ちました。龍夫の父親は、南洋の会社に勤め
 ていて、その地で病死したのです。なんでも臨終のさいま
 で、もう一度故国へ帰りたいたっていたことが、会社の友だ
 ちの便りで知らされると、

「きつと、お父さんの魂は、風に乗って帰ってきなさるだろう。」
と、龍夫の母親は、いいました。彼の耳には、いつまでもその
言葉が、消えずに残っていました。それで、台風の日には、か
ならず父親の魂が、飛ぶ雲と風に乗ってくるものと信じていま
した。

「台風は生きているってね。」

「ああ、僕の兄さんもそういつていた。」

「風が、ほんとうに生きているのかしらん。」

「目もあるし、口もあるし、尾もあるというから、生きているの
さ。」

源吉が、こういうと、龍夫は、喜ばしげに目を輝かして、

「口もあるの？」と、ききかえました。

「口は知らんけれど、目があつて、尾があるつて、たしかに兄さんがいつていた。」

「そんなことうそき、暖かい空気と冷たい空気の作用で台風ができるんだと、学校の先生がいつていたよ。」

「だって、不思議じゃないか。」

「それは、不思議だ。」

二人の子供は、このとき、いいあわしたように、空を仰いで、乱れて飛ぶ雲の影を見つめたのでした。

源吉が、台風を好きになつたのは、このほかにわけがありません。お宮の鳥居のかたわらにあつた、高い松の木にかかつてい

る枯れ枝かえだや、くもの巣すがきれいに洗あらい去さられて、さすががしくなるからであり、人間にんげんの手てのとどかない高たかいところのちりや、煤ばい煙いえんのよごれがみんな取とられて、清きよらかにされるからであり、また、いつ見みても気持きもちの悪わるくなる腐くされかかったブリキの、老おいぼれた看板かんばんが、一夜やのうちには、どこへか飛とんでしまい、そして、いつもごみばかりの川かわには、滔とうとう々として急流きゅうりゅうがうなり、なみなみと水みずがあふれて、そのうえ、いろんなものが、後あとから後あとから流ながれてくるからでした。

いつであつたか、源吉げんきちと龍夫たつおの二人ふたりが、豪雨ごううの後あとのこと、いまにもギイギイと鳴なつて、水勢すいせいのために押し流ながされそうな橋はしのたもとで、水面すいめんを見つめていると、いくつも赤あかいトマトが浮うき

つ沈^{しず}みつしてきました。二人^{ふたり}は、このダンスでもするようにな、おもしろそうに流^{なが}れていく、トマトに気^きを取^とられていると、こんどは人^{にんげん}間の頭^{あたま}ほどのかぼちやが流^{なが}れてきました。つづいて見^{けん}当^{とう}のつかぬ妙^{みょう}なものが……それは、近^{ちか}づく^{おお}と大きな竹^{たけ}かごだとわかつたのでした。

「おや、どこかの八百屋^{やおや}から流^{なが}れてきたんだよ。」

「きつと、川^{かわ}ぶちの八百屋^{やおや}に水^{みず}があ^あがったんだ。」

そのうちにこんどは、おけが流^{なが}れてきました。いったいどこの町^{まち}の八百屋^{やおや}だろうと思^{おも}っていると、あちらから、自^{じてん}転^{しゃ}車^のに乗^のつて、八百屋^{やおや}の主^{しゅじん}人^{おとこ}らしい男^{おとこ}が、なにか叫^{さけ}びながら、おけを拾^{ひろ}おうとして、追^おいかけてきました。けれど橋^{はし}のところまでくると立^た

ち止どまって、ただ見みているだけで、どうすることもできなかつたのです。

「釣り堀ぼりの金魚きんぎょやこいが流ながされたろう。水みずが引ひいたら田圃たんぼへいつてみようよ。」

龍夫たつおは、急きゆうに樂たのしそうに、いいました。そして、

「また、台風たいふうがこないかな。」といいました。

「昨日きのう、きたばかりじやないか。」

「すぐ後あとへ台風たいふうの卵たまごができたつて。」

「君きみ、そんなに台風たいふうが好きすかい。」

「僕ぼくのお父とうさんがくるんだもの、昨夜ゆうべも、いまごろお父とうさんが、

お通りだといつて、お母さんは、お仏壇に燈火をあげられた。

僕も、死んだら台風になるよ。」

「君、そうしたら、僕の家の上を通るだろう。」

「ああ、きつと通るよ。そのときは、君、見ておいで！」

「あはは……。」と、二人は、声をたてて笑いました。

そんな冗談をいった龍夫は、その年の秋の末、寒くなるう

とするおり、急性肺炎にかかつて、ほんとうに死んでしま

ました。

一年は、刻々と時計の針の進むごとく、また、いつしか季節

がめぐつてきた。

ラジオは、天気予報の時間に、台風の近づいたことを警告

していました。源吉は、龍夫のいた時分のことを思い出した。なんで彼のいったことを忘れよう。

前ぶれとして、いつものごとく、驟雨がやってきました。それは、銀の細引きのように太い雨が降り注ぎました。破れたといからは、滝津瀬と水が落ちました。屋根の上は風のためにしぶきをあげているし、木々の大枝がもまれにもまれていきます。

「愉快だな。」

源吉は、じつとしていられなくなって、小降りになるのを待ち、雨マントをかぶって外へ出ました。

「川の水が、去年のようになつぱいになつたらう。」
彼は、龍夫といっしょに立ってながめた、橋の方へいこうとし

ました。ちようど役所の退けごろで、雨の中を人々が往来
 しています。しかし老人の顔は、たいてい曇っていました。

「また出水するだろう、それで、床板をぬらすし、病気
 は出るし、作物にはよくないだろう。」

こう考えるのは、当然のことでした。しかし若いものは、元
 気よく見られました。男も、女も、なんの屈託もなさそうな顔
 つきをしています。むしろ、たまには、これくらいの苦しい経
 験をするほうが身の葉だと喜ぶようにさえいきいきとしていま
 した。なかにも小さな子供たちは、世の中がたちまち変わったよ
 うな気がして、はだしで飛び出して、ぎぶぎぶと小川となった往
 来をふみわけていました。

「いつも、こんなように、ここへ川が流れているといいんだね。」
また一人の子は、赤い糸を濁った水の中に流して、炎のごとく、
へびのように、ちらちらするのをおもしろがって見ていました。
ふだんなら、ここを自転車や、自動車が通つて、夢にもこんな遊びがされるとは思われなかつたのです。まったく台風のおかげでした。なんでも新しく、珍しく、元気のいいことが、子供にとつてうれしかったのです。

夕刻のラジオは、いよいよ夜になると、風速三十メートルに達するであろうというのです。

「兄さん、いま原っぱに建てかけている家が、飛ぶかもしれないね。」

源吉は、風の音をききながら、新聞を見ていた兄に話しかけました。

「そんな家は飛んでしまっただろう。この家の屋根だつて飛ぶかもしれないぞ。」

「風速三十メートルつて、どんなかな。」

「白瀬大尉や、アムンゼンや、シャツルトンらの探検した南極や、北極には、いつも三十メートル以上の暴風が吹いているそうさ。その氷原へ探検隊は、自分たちの国旗をたてたんだ。すると旗が、すぐにちぎれたというから、それだけでも風の烈さがわかるのだ。」

オーロラの怪光が彩る北極、ペンギン鳥のいる南極、

そこは、ふだん人間の住む影を見ない。ただ真つ白な荒寥
 とした鉛なまりいろ色ひかこおりに光る氷の波濤はとうが起伏きふくしていて昼夜ちゆうやの区別くべつなく、
 春夏はるなつあきふゆ秋冬あきふゆなく、ひっきりなしに暴風ぼうふうの吹ふいている光景こうけいが
 目めに浮うかぶのでした。

「生きているのは、台風たいふうだけでない。この世界せかいが生きているの
 だ！」と、源吉げんきちは、心こころで叫さけびました。

果たはして、真夜中まよなかのこと、ぶつかる風かぜのために、家いえがぐらぐら
 と地震じしんのように揺ゆれるのでした。風かぜは東南とうなんから、吹ふきつけるの
 でした。電燈でんとうは二、三度明滅どめいめつしたが、線せんが切斷せつだんされたとき
 えて、まったく消きえてしまった。裏うらの大きな桜さくらと、かしの木のほ
 える音おとが、闇やみのうちで死しにもの狂ぐるいに戦たたかっている獣けもののうなり声こえを

想像そうぞうさせました。

「いま台風たいふうは、僕ぼくの家の上うえを通りかけろのだ。龍夫たつおくんがくるだろう。」

源吉げんきちは、風かぜの比較ひかくてき的あ当たらぬ、北窓きたまどの戸とを開あけて空そらを仰あおぐと、地球ちきゅうが動うごくように、黒雲くろくもがぐんぐんと流ながれている。

けれど、またところどころに雲切くもぎれがして、そこからは、ほの白しろく光ひかりがもれるのでありました。

「龍夫たつおちゃん！」

源吉げんきちは、出でるだけこえの聲こえを張はりあげて叫さけんだ。その聲こえも、暴ぼうふ

風うに消けされて、ほかの人にんげん間の耳みみには入はいらなかつた。そして、窓まどから差さし出だした紙かみの旗はたは、たちまち雨あめに破やぶり飛とばされて、竹たけの

棒^{ぼう}だけが手^てに残^{のこ}つたのでした。

「きつと龍夫^{たつお}ちやんが、持^もつていったんだ。」

そう思^{おも}うと、不思議^{ふしぎ}や暗^{くら}い空^{そら}に大^{おお}きな穴^{あな}が開^あいて、星^{ほし}の光^{ひかり}が、幾^{いく}つか、ダイヤモンドのごとくかがやきました。

「龍夫^{たつお}ちやん。」

もう一^ど度^ど、彼^{かれ}は、星^{ほし}に向^むかつて叫^{さけ}んだのでした。

風^{かぜ}ばかりでなく、星^{ほし}も、雲^{くも}も、ことごとく生^いきていました。そ

して、ひとすじの細^{ほそ}い光^{こう}線^{せん}が、空^{そら}から胸^{むね}へ突^つきさしたごとく感^{かん}

じて、真^ま心^{まごころ}心^{まごころ}ささえあれば、龍夫^{たつお}が死^しんだお父^{とう}さんにあえたである

うように、源^{げん}吉^{きち}はいつでも台風^{たいふう}の日^ひには龍夫^{たつお}にあえると信^{しん}じ

たのでした。

台風たいふうの過ぎた、翌よくじつ日の朝あさの空そら色いろは、いつもよりかもっと、もつときれいでした。源げん吉きちは、茫ぼう然ぜんと台たい風ふうの去きつていった跡あとの、はるかちへいの地ち平へい線せんをながめてみると、緑みどり色いろの空そらから、龍たつ夫おが、にっこりと笑わらつて、

「これから、僕ぼくは、お父とうさんと地ち球きゅうを一し周ゆうして、さんご樹じゆのしげった南みなみの島しまへ帰かえるのだ。源げんちゃん、僕ぼくたちの住すんでいる、南みなみの方ほうへ、君きみもやつておいでよ。」

こういつているごとく、思おもわれたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「日本の子供」

1941（昭和16）年10月

※表題は底本では、「台風《たいふう》の子《こ》」となっています。

※初出時の表題は「颱風の子」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

台風の子

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>